

# 獄中体験、詩社の創設、娘の死…加藤介春の「光と影」

←明治後期の九州日報（西日本新聞の前身）。のちの小説家・夢野久作は、九州日報社の先輩である介春から文章を厳しく指導された。久作の作品「山羊鬚編集長」のモデルは介春。



明治43年4月、介春は大学の恩師・坪内逍遙の紹介で九州日報社に社会部長として入社。1年後は編集長に抜擢され、社長代理も務めるようになった介春は、紙面づくりにますます熱が入り、明治45年6月4日から「恋の大学生」の掲載を開始します。これは九州帝国大学の学生の放蕩ぶりを仮名を使って赤裸々にあばいた社会記事で、実話なので迫力があり、読者から大変好評を得ていました。事件は6月15日、記事に書かれた大学生の一人が記事の取り消しを求め、介春がそうと知らずに提供された30円を受け取ったことから「恐喝取

材」と告訴されて起こりました。介春はこの事件で、70日以上もの間、未決囚として福岡監獄で過ごすことになってしまったのです。出獄後、介春は九州日報の紙面上で身の潔白を証明すると同時に、いわれのない屈辱や嫌悪感が、無罪判決の後もいかに自分を苦しめたかを記しています。この事件は、記者となってからしばらく筆を断っていた介春に詩作意欲を再燃させる結果となりました。こうして大正3年3月、出獄後1年間に発表した作品をまとめた処女詩集『獄中哀歌』が刊行されました。この年、介春はトキと結婚し、翌年には第二詩集『梢を仰ぎて』を刊行。4人の子どもの誕生など、生活上の大きな変化がありながらも、介春は詩作をとおして山田牙城や原田種夫など後輩たちを指導し、地方詩壇の団結に尽力しました。また大正13年、いくつかの詩団体をまとめて「福岡詩社」を創設。大正15年には、第三詩集『眼と眼』が刊行されました。この「眼と眼」の冒頭には、大正6年発行の処女詩集『月に吠える』で全国的に有名になった詩人・萩原朔太郎の長文が序文として掲載されています。朔太郎は、介春の詩人として

の才能をその初期から高く評価していたようです。この時朔太郎は、「加藤介春氏は、異常な才能をもちながら、人気のこれに伴わない不運の詩人である」と述べています。早稲田大学時代と比べ、遠い九州の一角で、中央詩壇から遠ざかりつつあった介春。それでもなお地まずに福岡の地で詩作を続けました。昭和3年、介春は社長交代を機に福岡日日新聞社に入社。また昭和4年には、「全九州詩人協会」が創立し、介春はこの協会の賛助員として北原白秋、浦瀬白雨とともに名を連ねます。そして昭和8年6月、介春の呼びかけにより、全九州詩人の総結集をはかった「九州詩社」が創設。介春はその中心人物となって、西日本の近代詩壇に大きな影響を与えました。

しかし昭和12年8月に次女和子が結核を患い17歳で亡くなって以降、介春は娘に先立たれた深い悲しみから抜け出せず、詩作のペースは極端に落ち込みます。また戦況の悪化などの影響もあり、ますます虚無感や絶望感を募らせたのかも知れません。さまざまな苦悩と葛藤の中を生き、詩人としてもジャーナリストとしても人々に大きな影響を与えた介春。介春は終戦直前の昭和20年8月、36年にわたった記者人生に終止符を打ち、故郷に戻って晩年を迎えます。



↑明治45年6月4日から23日まで全20回にわたり、7人の大学生を仮名で取り上げて学生の非行を改めさせようと、彼らの道楽ぶりを中心に描いた「恋の大学生」。大学では大騒ぎになるが、介春は追求の手をゆるめなかった。

→獄舎での憂うつな気持ちを吐露した処女詩集『獄中哀歌』。

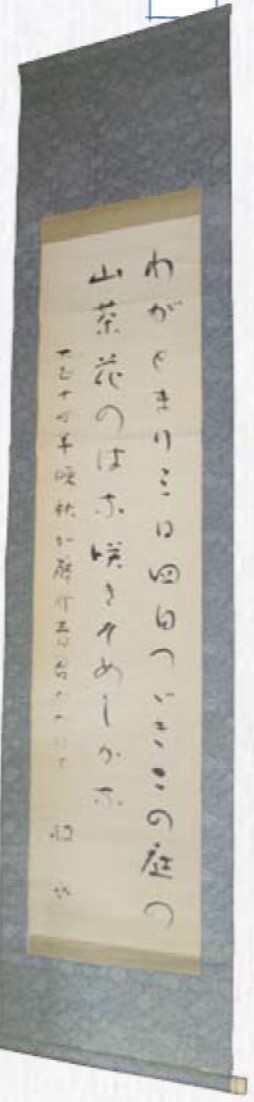
## 『加藤寿太郎』の素顔 ●加藤高弘さん・保子さん（市場草場）

### 寿太郎さんは毎日、孫に会うため草場から下境まで歩いて来られていました

「無口で自他に厳しく、孤独を好んだ人だったそうです」と介春の孫・高弘さん。当時、介春を知る誰もが、彼の性格をそのように表していました。その反面、心を許した人には持ち前の優しさを存分に発揮し、歌人の若山牧水とは、大学時代から生涯に渡って交流を持ったといわれています。また、引越しの際は必ず学校や

病院の近くを選んでいくこと、子どもにせがまればいつでも不得意な鶏の絵を描いたり、童話を話したり、映画や歌舞伎に連れて行ったりしていたことなどから、家族のことをとても大切にしていたのがうかがえます。しかし大切に思うあまり、つい過度に心配したり、厳しくするところもあつたようです。高弘さんの父で介春の長男・修三さんが画家をめざし美術学校に行きたいと言いつつ、介春は一人京都まで出掛けて学校のことを調べ、画家に修三さんの絵を見てもらうなど、陰で細かな配慮を尽くしました。介春が実家に帰ってきた昭和20年、1歳の高弘さんは直方市下境の母・保

子さんの実家で暮らしていました。「寿太郎さん（介春）は毎日、高弘に会いに草場から下境まで歩いて来ていました。寡黙な人なので幼子をあやしたりはしませんでした。常に健康状態を気に掛けながら、孫の成長を見守っていましたね」と保子さん。この時期、介春は孫のことを詠んだ俳句を多く制作しました。そしてそれらは、彼の作品の中で唯一「加藤寿太郎」の名によって書かれています。これは愛しい孫と豊かな自然に囲まれた故郷の生活の中で、詩人としてではなく、加藤寿太郎その人として、穏やかな心情が取り戻されていった様子を物語っているのではないのでしょうか。



→歌人・若山牧水が介春の家に滞在していた時に書かれたもの。介春は自分の好きな「山茶花」が詠まれたこの句を大切にしていたという。

↑介春から母親にあてた手紙。母を思う介春の優しい気遣いを感じられる。



↑昭和3年ごろ。前列左から介春、母・トシ、義妹・武子、姉・ヤエノ、後列左から義弟、妻・トキ、長女・政子、姉・フクエ、妹・トシエ。



↑加藤 保子さん・Yasuko Kato  
介春の長男・修三さんの妻。介春は亡くなる前の数か月間、保子さんと共に草場の家で過ごした。



↑加藤 高弘さん・Takahiro Kato  
介春の長男・修三さんと保子さんの子。介春は高弘さんのことと思われる句を数首詠んでいる。

